を得ずと云ふことなし。

（大日經開題）

三〇

重陰昏蔽して日輪隱沒すれども亦壞滅するに非ず、猛風雲を吹いて日光顯照すれども亦始めて生ずるに非ざるが如く、佛心の日もまた復（マタ）かくの如し、無明煩惱戲論重雲のために覆障せらるると雖も而も滅する所なく、諸法の實相三昧を究竟して圓明無際なれども增する所なし。

（大日經開題）

三一

少分相似（サウジ）の義を取つて加ふるに大の字を以てして、世間の日に擇ぶ、故に摩訶と云ふ、摩訶とは是れ梵語なり、此には翻ずるに三

義あり、一には竪横無邊際の故に大と云ふ、二には數量過刹塵の故に多と云ふ、三には是れ最勝最上の故に勝と云ふ、摩訶の言に此の三義を具す、故に摩訶毗盧遮那と云ふなり。

（大日經開題）

三二

謂はゆる大とは人中の大、法中の大、教中の大、義中の大、體中の大、相中の大、用中の大、乘中の大、因中の大、行中の大、果中の大、人中の大、理中の大、智中の大、定中の大なり、是の如く十佛刹微塵數の大を具す、此の大は則ち絶待常住不二の大なり、是れ相待無常の大にはあらず、遍照を以て譬と爲し帝網（タイモウ）に寄せて喩を顯はす、蓋し此に在り。

（大日經開題）

三三

毗盧遮那を則ち大我と名く、我は則ち大自在の義なり。（大日經開題）

三四

一切世間は我我を計すと雖も未だ實義を證せず、唯だ大日如來のみ有（キマ）して無我の中に於て大我を得たまへり。（吽字義）

三五

如來の說法は先づ二我の執を離れしめ、無我の大我を證せしむ。（大日經開題）

三六

如來の說法は衆生をして妄計の我を離れて無我の大我を證し、邪の因果を捨てゝ本性の大空に入らしめんがための故に。（梵網經開題）

三七

內心の大我は法界に都して常恒なり、金蓮（コンレン）の冒地（バウヂ）は心殿に會して以て不變なり、不變の變は刹塵に遍じて物に應じ、應物の化は沙界に滿ちて人を利す、體用大奇なるは我が大師薄伽梵其の人なり。（性靈集八）

三八

遍照法王法界宮に安住して、莊嚴の祕藏を開き三密の法輪を轉ず、卽身成佛是の日雷震し、我則法身是の時師吼す、無等三等未だ聞かざるに今聞き、五智本具は昔失へるに忽ちに得たり。（大日經開題）

三九

上大日尊より下六道の衆生の相に至るまで、各各の威儀に住して種種の色相を顯はす、並びに是れ大日尊の差別智印なり、更に他身に非ず。

（大日經開題）

四〇

五大に皆響(ヒビキ)あり、十界に言語を具す、六塵悉く文字なり、法身は是れ實相なり。

（聲字義）

四一

法身の三密は纖芥(センガイ)に入れども迮(セバ)からず、大虛(タイコ)に亙(ワタ)れども寛(ヒロ)からず、瓦石草木を簡ばず、人天鬼畜を擇(キラ)はず、何れの處にか遍ぜざる、何物をか攝せざらん。

（吽字義）

四二

法身は大虛に同じて無碍なり、衆象を含じて常恒なり。

（即身義）

四三

法身何(イヅク)にか在る遠からずして即ち身(ミ)なり、智體云何ん我が心にして甚だ近し、本來無去(モトヨリコノカタムコ)にして鎮(トコシナ)へに滿月(マンゲツ)の宮(ミヤ)に住し、如今不生(イマフシヤウ)にして赫日(カクニチ)の臺(ウテナ)に常恒なり、攝(セフ)下の迹息(ヤ)まず、自用の歡び何(イカ)んが窮らん。

（性靈集七）

四四

色を孕(ハラ)むものは空なり、空を呑むものは佛なり、佛の三密は何れ

の處にか遍ぜざらん、佛の慈悲は天の如くに覆ひ地の如くに載す、悲は則ち苦を拔き慈は能く樂を與ふ。

（性靈集八）

四五

法性身の佛は心より無量の諸佛及び無量の菩薩を流出す、皆同一性なり、謂く金剛性なり。

（平城天皇灌頂文）

四六

一切の色像の悉く高臺の明鏡の中に現ずるが如く、如來の心鏡もまた復かくの如し、圓明の心鏡高く法界の頂きに懸つて寂にして一切を照して不倒不謬なり、かくの如くの圓鏡いづれの佛にか有らざらん。

（卽身義）

四七

日月星辰は本より虛空に住すれども、雲霧蔽（イキ）し烟塵映覆す、愚者はこれを視て日月なしと謂（オモ）へり、本有（ホンウ）の三身もまた復（マタ）かくの如し、無始より以來（コノカタ）本より心空に住すれども、覆ふに妄想を以てし、繦ふに煩惱を以てす、事は篋鏡（ケフギヤウ）に均しく理は礦珠に同じ、盲者はこれを視て本覺なしと謂（オモ）へり。

（吽字義）

四八

金剛寶に多くの功德を具す。此の寶は地に埋むれども朽ちず、火に入れども銷えず、貧人は見難く、得るものは富貴なり、（中略）如來の實智も多くの功德を具す。久しく無明煩惱の地の中に埋むれ

ども曾つて朽爛せず、無間瞋恚の火に入れども消えず融(ト)けず、下劣の凡夫は億劫にも見難く、若し能く得證すれば三界の法王となる。

（金剛頂經開題）

四九

一切如來とは顯密の二意を具す、顯の義は十方三世の一切諸佛を一切如來と名く、是れ則ち各各の衆生如實の道を修し去つて正覺を成じ來つて衆生を化するを如來と名く、密の義は五智の佛を一切如來と名く、一切の諸法を聚めて共じて五佛の身を成ずるが故に、此の五佛は卽ち諸佛の本體諸法の根源なり、故に一切如來と名く。

（金剛頂經開題）

五〇

緣謝すれば則ち滅し、機興ずれば則ち生ず、事に卽して而も眞なり、終盡あることなし。

（大日經疏一）

五一

一明一暗は天の常なり、乍ちに現じ乍ちに沒するは聖の權なり。

（性靈集二）

五二

實際を動ぜずして巧みに方便を施し、法性を毀(ソコナ)はずして能く假名(ケミヤウ)を說く。

（大日經開題）

五三

仁王の國を治むる封賞差あり、法帝の世を御するは攝引一にあらず、差あるは能治の不平に非らず、不一は還て是れ所化の機の別なればなり。

（付法傳）

五四

一味の甘露は器に逐つて色を殊にし、一相の摩尼は色に隨つて影を分つ、能說の心は平等にして轉ずれども、所潤の意千殊にして各〻解す、一三五乘源一にして派別る、法報應化體同にして用異なり。

（付法傳）

五五

一月虛空に處するに、影は千萬の水に分つ。

（宗祕論）

五六

佛日の影衆生の心水に現ずるを加と曰ひ、行者の心水能く佛日を感ずるを持と名づく。

（卽身義）

五七

三等の法門は佛日に住して常に轉じ、祕密の加持は機水に應じて斷へず。

（性靈集七）

五八

黑暗は生死の源、遍明は圓寂の本なり、其の元始を原ぬれば各〻因緣あり、日燈空に擎げたれども唯だ一天の暗を除き、月鏡漢に懸れども誰か三千の明を作さんや、大日遍く法界を照らし智鏡高

く靈臺に鑒(カンガミ)るが如きに至つては、内外の障(サハリ)悉く除き、自他の光(ヒカリ)普く擧ぐ、彼の光を取らんと欲はば何ぞ仰止(ゲウシ)せざらん。（性靈集八）

教藥品

五九

病なきときは則ち藥なし、障りあるときは則ち教あり、妙藥は病を悲しんで興り、佛法は障りを愍れんで顯る。（寶鑰中）

六〇

如來の說法は病に應じて藥を投ぐ、根機萬差なれば針灸千殊なり。（二教論上）

六一

四大の疾は藥針の治する所、一心の患は深法能く療す。（拾遺雜集）

六二

如來大師は機に隨つて藥を投じたまふ、性欲（シヤウヨク）千殊にして藥種萬差

なり。

（性靈集十）

六三

宅に歸るには必ず乘道に資る、病を癒すには會らず藥方に處る、病源巨多なれば方藥非一なり、己宅遠近なれば道乘千差なり。

（十住心論一）

六四

法界を一心に包み衆生を四恩に顧みたまふ、衆生の苦を拔き衆生の樂を與ふ、拔苦の術正行に非ざれば得ず、與樂の道正法に非ざれば能はず、謂はゆる正行正法は機に隨つて門多し、機根萬差なれば法藥隨つて殊なり。

（平城天皇灌頂文）

六五

法は本より言なけれども、言に非ざれば顯はれず、眞如は色を絕すれども、色を待ちて乃ち悟る、月指に迷ふと雖も提撕極りなし、目を驚かす奇觀を貴ばず、誠に乃ち國を鎭め人を利する寶なり。

（御請來錄）

六六

法の物たるや妙なり、教の趣たるや遠し、之に遇ふ者は泥を拔けて漢に翔り、之を失ふ者は天より獄に入る、濟渡の船筏、巨夜の日月なるものなり。

（性靈集五）

六七

教は是れ迷方の示南なり、衆生の迷衢を開示す。

六八

（性靈集九）

物に定まれる性なし、人何んぞ常に惡ならん、緣に遇ふ時は則ち庸愚も大道を庶幾ふ、教に順ずる時は則ち凡夫も賢聖に齊しからんと思ふ。

（寶鑰上）

六九

大慈は樂を與へ、大悲は苦を拔く、拔苦與樂の本、源を防がんにはしかず、源を防ぐの基、教に非ずんば得ず。

（寶鑰中）

七〇

馬を御むるの法、鑣策に非ざれば能はず、人を馭むるの道、教令に非ざれば得ず。

（寶鑰中）

七一

愚人は月を識らず、智人は手指を將ふ、指端は月の體に非ざれども、月を見るは還つて指に因るなり。

（宗祕論）

七二

釋教は浩汗にして際なく涯なし、一言これを蔽へば唯だ二利に在り、常樂の果を期するは自利なり、苦空の因を濟ふは利他なり。

（御請來錄）

七三

教法は本差あることなし、牛と蛇との飲水の如し、牛飲めば蘇乳

と成り、蛇飲めば毒刺と成る、智學は菩提を成じ、愚學は生死を成ず。

（宗祕論）

七四

愚に於ては毒となり、智に於ては藥となる。

（聲字義）

七五

病に體へば悉く藥なり、方に背けば並びに毒なり。（中略）これに迷ふ者は藥を以て命を夭し、これに達する者は藥に因つて仙を得。

（十住心論一）

七六

祕號を知る者は猶し麟角の如く、自心に迷へる者は既に牛毛に似

たり、是の故に大慈此の無量乘を説いて一切智に入らしめたまふ、若し竪に論ずれば乘乘差別にして淺深あり、横に觀ずれば智智平等にして一味なり、惡平等の者は未得を得とし不同を同とす、善差別の者は分滿不二卽離不謬なり、これに迷へる者は藥を以て命を夭し、これに達する者は藥に因て仙を得、迷悟己れに在り執無うして到る。

（十住心論一）

七七

法海一味なれども機に隨つて淺深あり、五乘鑑を分つて器に逐つて頓漸あり、頓教の中に顯あり密あり、密藏に於ては或は源或は派、古の法匠は派に泳ぎ葉に攀づ、今の所傳は枿を拔き源を竭

す。

七八

應化の開說を名けて顯教と曰ふ。言顯略にして機に逗へり、法佛の談話これを密藏と謂ふ、言祕奥にして實說なり。（二教論上）

七九

いはゆる祕密に且く二義あり、一には衆生祕密、二には如來祕密なり、衆生は無明妄想を以て本性の眞覺を覆藏するが故に衆生自祕と曰ふ。應化の說法は機に逗つて藥を施す、言虛しからざるが故に、所以に他受用身は內證を祕して其の境を說きたまはず、則ち等覺も希夷し十地も離絕せり、これを如來祕密と名く。（二教論下）

（御請來錄）

八〇

この法は則ち諸佛の肝心、成佛の徑路なり、國に於ては城墎たり、人に於ては膏腴たり、是の故に薄命は名をも聞かず、重垢は入ること能はず。（御請來錄）

八一

此の法は佛の心、國の鎭なり、氛を攘ひ祉を招く摩尼、凡を脫して聖に入る崛徑なり。（性靈集五）

八二

人の貴きは國王に過ぎず、法の最なるは密藏にしかず。（性靈集二）

八三

字は法然の文を寫し、義は無盡の旨を明す。

八四

（性靈集八）

性薫我（シヤウクン）を勸めて還源（グンゲン）を思ひとす、徑路未だ知らず岐（チマタ）に臨んで幾たびか泣く、精誠感ありて此の祕門を得たり。

（性靈集七）

八五

冒地（バウヂ）の得がたきには非ず、この法に遇ふことの易からざるなり。

（性靈集二）

八六

一句の妙法は億劫にも遇ひ難く、一佛の名字は憂曇（ウドン）も喩に非ず。

（寶鑰中）

八七

滿界の財寶も一句の法にしかず、恒沙の身命も四句の偈に比せず。

（寶鑰中）

八八

顯藥は塵を拂ひ、眞言は庫を開く、祕藏忽ちに陳じて萬德卽ち證す。

（寶鑰上）

八九

九種の心藥は外塵を拂つて迷を遮し、金剛の一宮（イツクウ）は內庫を排（ヒラ）いて寶を授く。

（寶鑰上）

九〇

眞言は不思議なり、觀誦すれば無明を除く、一字に千理を含み、即身に法如を證す、行行として圓寂に至り、去去として原初に入る、三界は客舍の如し、一心は是れ本居なり。

九一　（祕鍵）

眞言持念すれば凡身即ち是れ佛なり、一字理と相應すれば便ち金剛の種智を成ず。

九二　（宗祕論）

總持の妙藥は能く一切の重罪を消し速に無明の株杌を拔く。

九三　（十住心論一）

一佛の名號を稱して無量の重罪を消し、一字の眞言を讃じて無邊の功德を獲。

九四　（寶鑰中）

一尊一契は證道の徑路、一字一句は入佛の父母なり。

九五　（性靈集二）

祕密速疾門の甚深無相の理は、能く業障の山を摧き、能く貪愛の水を竭す。

九六　（宗祕論）

海水毛塵は數へて知るべくも、眞言の教法は窮限あることなし。

（宗祕論）

九七

此の眞言は何物をか詮ずる、能く諸法の實相を呼んで不謬不妄なり、故に眞言と名く。

（聲字義）

九八

名の根本は法身を根源とす、彼より流出して稍（ヤウヤ）く轉じて世間流布の言となるのみ、若し實義を知るをば則ち眞言と名け根源を知らざるをば妄語と名く、妄語は則ち長夜に苦を受け、眞言は則ち苦を拔き樂を與ふ。

（聲字義）

九九

眞言は本（モト）言なし、文字は聲に因つて生ず、大悲を以て胎藏と作し、阿字を以て種子とす。

（宗祕論）

一〇〇

如來の說法は必ず文字に藉る、文字の所在は六塵其の躰なり、六塵の本は法佛の三密卽ち是れなり、平等の三密は法界に遍じて常恒なり、五智四身は十界に具して缺げたることなし。

（聲字義）

一〇一

道の本は無始無終、敎の源は無造無作、三世に亙（ワタ）つて變ぜず、六塵に遍じて常恒なり。

（法花經開題）

一〇二

祕藏の奧旨は文を得ることを貴しとせず。たゞ心を以て心に傳ふ

るにあり、文はこれ糟粕、文はこれ瓦礫なり。（性靈集十）

一〇三

密藏深玄にして翰墨に載せ難し、更に圖畫を假りて悟らざるもの に開示す。（御請來錄）

一〇四

道自ら弘まらず、弘まること必ず人に由る。（付法傳上）

一〇五

大聖教を設けたまふ、佛法既に存せり、弘行は人に在り。（寶鑰中）

一〇六

法は惟れ甘露、嘗むる者は痾を除く、道は惟れ無言、人能く演暢

す。（拾遺雜集）

一〇七

法は人に資つて弘まり、人は法を待つて昇る、人法一體にして別 異なることを得ず。（寶鑰中）

一〇八

物の興廢は必ず人による。人の昇沈は定んで道にあり。（性靈集十）

一〇九

艾は能く濟し車は能く運ぶ、然れども猶し御する人なくんば遠き に致すこと能はず、柁の師なくんば深きを越ゆること能はず、道も 亦かくの如し、人を導くは教なり、教を通ずるは道なり、道は人

なきときは壅(フサ)がり、教は演ぶることなきときは廢(スタ)る。（性靈集十）

一一〇

或は行はれ或は藏(カ)くる、時の變なり、乍(タチマ)ちに興り乍ちに廢る、實に人に由れり、時至り人叶ふときは道無窮に被らしむ。（性靈集五）

一一一

雙圓の性海には常に四曼の自性を談じ、重如(チユウニヨ)の月殿には恒に三密の自樂を說くと云ふに泊(オヨ)んでは、人法法爾なり興廢何れの時ぞ、機根絕絕たり正像何ぞ別(ワカ)たん。（教王經開題）

學道品

一一二

古の人は道を學んで利を謀らず、今の人は書を讀んでたゞ名と財とにす。

（性靈集一）

一一三

古の人は道のために道を求む、今の人は名利のために求む、名のために求むるは求道の志にあらず、求道の志は己を道法に忘る。

（性靈集十）

一一四

我今阿耨多羅三藐三菩提を志求して餘果を求めずと誓心決定するが故に、魔宮震動し十方の諸佛皆悉く證知したまふ。

（菩提心論）

一一五

凡そ福慧を崇めんとならば、須らく明師に問ふべし、菩提に趣かんと欲はば、善知識を求むべし、當處にもし智解のものなくんば萬里に方に廣く尋ぬべし、未だ學ばずして道を成じ、空を談じて道を就すことを見ず。

（宗祕論）

一一六

若し夫れ三老五更は至尊肉袒の養を致し、崆峒溪水は天子齋戒の問を遺す、況んや復巖下に身を投じ、藪中に位を捨て、臂を斷ちて誠を示し、體を割いて信を表し、求法の思を竭し、道を殉むるの懇ろなることを馳するをや、三世の索哆これに因つて果を得、十方の如知これを修して道を證す。

（性靈集十）

一一七

空海菫茗に生れて躅水に長ぜり、器は則ち斗筲、學は則ち戴盆、然りと雖も、市に哭するの悲しみ日々に新たに、城を歴るの歎き彌々篤し。

（性靈集五）

一一八

朋を百城に訪つて勇鋭の心彌々勵まし、恵を一市に哭して渴法の意常に新なり。

（性靈集七）

一一九

上天子に達し下凡童に及ぶまで、未だ學ばずして能く覺り教に乖

いて自ら通ずるものあらじ。

一二〇

寶珠砌に在れども瑩かざれば則ち雨寶の功なし、智鏡心に處すれども縁なきときは則ち利物の力なし。（性靈集七）

一二一

楚璞光を致すこと必ず錯礪を須ち、蜀錦彩を摛ること尤も江に濯ぐに資れり。（三教指歸上）

一二二

玉は琢磨によつて照車の器となり、人は切瑳を待つて穿犀の才を致す。（三教指歸上）

一二三

寒を經暑を經れども其の苦を告げず、飢に遇ひ疾に遇へども其の業を退せず。（性靈集二）

一二四

雪螢を猶怠るに拉ぎ、繩錐の勤めざるに怒る。（三教指歸序）

一二五

松竹その心を堅うし、氷霜その志を瑩く。（性靈集二）

一二六

飽まで滋き味を食て徒らに百年を勞せんこと既に禽獸に同じく、燠に錦繡を衣て空しく四運を過さんこと亦犬豚の如し。（三教指歸上）

一二七

日に一日を愼み、時に一時を競ひ、孜々として鑽仰し、切切として斟酌せん、縹囊黄卷をば吐握にも弃てず、青簡素鉛をば顛沛にも離たず。（三教指歸上）

一二八

須らく鄉を擇んで家とし、土を簡んで屋とし、道を握つて床とし、德を挈げて褥とし、仁を席として坐り、義を枕として臥し、禮を被として以て寢ね、信を衣として以て行くべし。（三教指歸上）

一二九

空海才能聞えず、言行取なし、ただ雪中に肱を枕とし、雲峯に菜を喫ふことをのみ知れり。（性靈集五）

一三〇

嚴冬の深雪には藤衣を被て精進の道を顯はし、炎暑の極熱には穀漿を斷絶して朝暮に懺悔すること二十年に及べり。（二十五條御遺告）

一三一

凡そ出家修道はもと佛果を期す、更に輪王釋梵の家を要めず、豈に況んや人間少少の果報をや。（弘仁御遺誡）

一三二

菩提心を因とし、大悲を根とし、方便を究竟とす、是れ卽ち眞言行者の用心なり。（祕藏記）

一三三

若し衆生ありて菩提心を發し、自乘の教理を修行し、昇進して本覺の一心を證すれば、則ち能く迷識の神心を轉變して自乘の覺智を證得し、一切の難思の妙業心に隨つて能く作す。

（大日經開題）

一三四

隨緣の本智は生死に流轉し源に背いて時久し、若し內薫外緣の力に遇へば生死を厭うて涅槃を欣ひ、始覺の日光を發して無明の闇夜を照らし、本有の寶藏を知つて悉く自家の功德を得、之を現證と名く。

（金剛頂經開題）

一三五

朝な朝なもつぱら自心の宮を觀ぜよ、自心は亦是れ三身の土なり、五智の莊嚴本より豐かなり。

（性靈集一）

一三六

若（モシ）は行、若（モシ）は坐、道場卽ち變ず、眠りに在つても覺めたるに在つても觀智離れず。

（性靈集二）

一三七

三時に上堂して本尊の三昧を觀じ、五相入觀して無上の悉地（シッヂ）を證すべし。

（性靈集九）

一三八

妄心若し起らば知つて隨ふことなかれ、妄若し息む時は心源空寂

なり。

一三九

水と波と同じく一濕、眞と妄と本より同居す、眞心妄に隨つて轉じて無餘に入ることを得ず。

（菩提心論）

一四〇

身病を治するには必ず三の法による、一には醫人、二には方經、三には妙藥なり、病人若し醫人を敬ひ方藥を信じ心を至して服餌すれば疾卽ち除愈す、病人若し醫人を罵り方藥を信ぜず妙藥を服せずんば病疾何によつてか除くを得む、如來衆生の心病を治し玉ふこともまた復かくの如し。

（宗祕論）

（寶鑰中）

一四一

能く誦じ能く言ふこと鸚鵡も能くなす、言つて行ぜずんば何ぞ猩々に異ならん。

（寶鑰中）

一四二

妙藥篋に盈つるも嘗めざれば益なし、珍衣櫃に滿つれども著ざれば則ち寒し。

（性靈集十）

一四三

心の海岸に達せんと欲はば、船に棹さゝんにはしかず、船筏の虛實を談ずべからず、毒箭を拔かんには空しく來處を問はざれ。

（性靈集十）

一四四

百歳八萬の法藏を談論すとも三毒の賊寧ろ調伏せんや。（性靈集十）

一四五

法は是れ難思なり、信心能く入る。（性靈集十）

一四六

信修すれば則ち其の人なり、若し信修することあらば男女を論ぜず皆是れ其の人なり、貴賤を簡ばず悉く是れ其の器なり。（性靈集十）

一四七

發心して遠渉せんには足に非ざれば能はず、佛道に趣向せんには戒に非ざれば寧ろ到らんや。必ず須(スベカラ)く顯密二戒堅固に受持して清淨にして犯すことなかれ。（弘仁御遺誡）

一四八

かくの如きの諸戒は十善を本とす、謂はゆる十善とは身三語四意三なり、末を攝して本に歸すれば一心を本とす、一心の性は佛と異なることなし、我心と衆生心と佛心との三差別なし、此の心に住すれば卽ち是れ佛道を修す、是の寶乘に乘ずれば直に道場に至る。（弘仁御遺誡）

一四九

昔の邪心を捨てゝ戒を受けて正に歸すれば人天稽首(ケイシュ)し、諸佛同じく慶(ヨロコ)びたまふ。（十住心論二）

一五〇

五濁の澆風を變じて三學の雅訓を勤め、四恩の廣德に酬ひて三寶の妙道を興せ。

（性靈集九）

一五一

九流六藝は代を濟ふ舟梁、十藏五明は人を利する惟れ寶なり、故に能く三世の如來兼學して大覺を成じ、十方の賢聖綜通して遍知を證す、未だ一味美膳を作し片音妙曲を調ぶるものはあらじ、身を立つるの要、國を治むるの道、生死を伊陀に斷じ、涅槃を蜜多に證すること、此を棄てゝ誰ぞ。

（性靈集十）

一五二

長兄は寛仁を以て衆を調へ幼弟は恭順を以て道を問へ、賤貴を謂ふことを得ざれ。

（承和御遺誡）

一五三

頭を剃り染を著する類は我が大師薄伽梵の子なり、僧伽と呼ぶ、僧伽は梵名なり、翻じて一味和合と云ふ、意を等しくして上下諍論なく、長幼次第あり、乳水の別なきが如くして佛法を護持し、鴻雁の序あるが如くして群生を利濟すべし、若し能く悟解し已るをば卽ち是れ佛弟子と名く。

（性靈集九）

一五四

心慈悲に住し思忠孝に存して貴賤を論ぜず貧富を看ず、宜しきに

隨つて提撕(ティゼイ)し人を誨(ヲシ)へて倦まざされ。

一五五　（性靈集十）

三界は吾が子なりといふは大覺の師吼、四海は兄弟なりといふは將聖の美談なり。

一五六　（性靈集十）

貧を濟ふには財を以てし、愚を導くには法を以てす。財を積まざるを以て心とし、法を悋(オシ)まざるを以て性とす。

一五七　（性靈集二）

菩薩の用心は皆慈悲を以て本とし、利他を以て先とす。

一五八　（寶鈴中）

殑河の女人は子を愛するに因つて天上に生じ、坐海の丈夫は慈悲を發して以て大覺と成る、然れば則ち兼愛は受樂の因、大悲は脫苦の本なり、三世の如去は之に因つて道を成じ、十方の薩埵は之を行じて滅を證す。

一五九　（性靈集八）

生々世々に同じく佛乘に駕して共に群生を利せん。

一六〇　（性靈集十）

虛空盡き衆生盡き涅槃盡きなば我が願も盡きなん。

（性靈集八）

實

相

品

一六一

霧を褰(カ)げて光を見るに無盡の寶あり、自他受(ジュヨウ)用日に彌〻新なり。

（寶鑰上）

一六二

醫王の目には途に觸れて皆藥なり、解寶(ゲホウ)の人は礦石を寶と見る。

（祕鍵）

一六三

醫眼の視る所は百毒藥と變じ、佛慧の照す所は衆生卽ち佛なり、衆生の體性、諸佛の法界、本來一味にしてすべて差別なし。

（平城天皇灌頂文）

一六四

一切の無明煩惱、大空三昧に入りぬれば則ちすべて所有なく、一切の塵垢卽ち財となる。（梵網經開題）

一六五

一物に於て迷悟に隨つて煩惱と云ひまた菩提と云ふ、是れ異體の物にあらず。（異本卽身義）

一六六

三界は客舍の如し、一心は是れ本居なり。（祕鍵）

一六七

萬法は心に從つて有り、舟行けば岸遷ると謂ひ、雲駐（ハシ）れば月走ると見る、眞體本より凝然（ギヨウネン）として空有に著せず、有と執するときは便ち縛となり、無と言ふときは卽ち空に落つ。（宗祕論）

一六八

有漏の微塵國は皆心想より生ず、如來の遍知海も亦心想より起る。（宗祕論）

一六九

淨念は蓮華に坐し、垢心は惡趣に沈む。（宗祕論）

一七〇

安樂都史本より胸中なり。（性靈集三）

一七一

本淸きは則ち心王の體性なり、塵垢は卽ち心數の本名なり、三毒

五逆皆是れ佛の密號名字なり、若し能く此の意を得るときは則ち染淨に著せず善惡に驚かず、五逆を作して忽ちに眞如に入り、大欲を起して乍ちに法身を得。（梵網經開題）

一七二

若し能く明かに密號名字を察し、深く莊嚴祕藏を開くときは、地獄天堂、佛性闡提（センダイ）、煩惱菩提、生死涅槃、邊邪中正、空有偏圓、二乘一乘、皆これ自心佛の名字なり、いづれをか捨ていづれをか取らん。（十住心論二）

一七三

萬法は唯心なり、心の實相は卽ち是れ一切種智なり、卽ち是れ諸法法界なり、法界卽ち是れ諸法の體なり。（吽字義）

一七四

一心法界は猶し一虛の常住なるが如く、塵數の智慧は譬へば三辰の本有なるが如し。（吽字義）

一七五

近うして見難きは我が心なり、細にして空に遍ずるは我が佛なり、我が佛は思議し難し、我が心は廣にして亦大なり。（寶鑰下）

一七六

本有の金剛薩埵は無始無終にして生滅なく、性相常住にして虛空に等し。（平城天皇灌頂文）

一七七

池中の圓月を見ては普賢の鏡智を知り、空裡の恵日を仰いでは遍智の我にあることを覺る。（性靈集二）

一七八

諸佛も法界なれば我身中（ウチ）に在り、我身も法界なれば諸佛中（ウチ）に在り。（理觀啓白文）

一七九

攝持とは入我我入なり、自心の塵數の佛能く他心の佛に入り、他心の塵數の佛能く自心の佛に入り、彼此互ひに能攝所攝能持所持と爲る、能く此の理を觀ずれば自他の善惡の心を攝持す。（平城天皇灌頂文）

一八〇

彼の身卽ち是れ此の身、此の身卽ち是れ彼の身、佛身は卽ち是れ衆生身、衆生身は卽ち是れ佛身、不同にして同なり、不異にして異なり。（卽身義）

一八一

若し自心を知るは卽ち佛心を知るなり。佛心を知るは卽ち衆生の心を知るなり。三心平等なりと知るを卽ち大覺と名く。（性靈集九）

一八二

三等の理彼此異なることなく、五智の覺人我れ同じく得たり、座を起たずして金剛卽ち是れ我が心、三劫を經ずして法身卽ち是れ

我が身なり、三部の諸尊宛然(エンネン)として而も具し、三妄の衆障忽爾として現ぜず、無量の福智求めざるに自ら備はり、無邊の通力營まざるに本より得たり。（大日經開題）

一八三

かくの如きの諸尊其の數無量なり、此の無數の佛は一衆生の佛なり。（平城天皇灌頂文）

一八四

三密の法輪は不斷にして常に轉じ、一心の妙覺は何者にか有らざらん。（大日經開題）

一八五

體あるものは方(マサ)に心識を含み、心あるものは必ず佛性を具す。（拾遺雜集）

一八六

有形有識は必ず佛性を具す。佛性法性法界に遍じて不二なり。自身他身一如とともんじて平等なり。（性靈集九）

一八七

團團たる性月は十界に映じて虧(カ)げず、盈たず、蔚蔚(ウツウツ)たる智蓮は四生を戴せて以て常に開け常に鮮(アサヤ)かなり。（大日經開題）

一八八

重圓の性海は風水の談を超え、雙如の一心は言心の境に非ず、大

我は其の朗月を都とし、廣神は其の心宮に住す。（法華經開題）

一八九

衆寶の心殿は高廣にして無邊なり、光明の日宮は遍ぜざる所なし、眞言の大我は本より心蓮に住し、塵沙の心數は自から覺月に居す。（性靈集七）

一九〇

菩提心は珠に似たり、内外に瑕垢なし、圓明なること大虚に等し。（宗祕論）

一九一

若し人佛慧を求めて菩提心に通達すれば、父母所生の身に速に大覺の位を證す。（菩提心論）

一九二

謂はゆる大覺は根本の五智十六智及び三十七智乃至塵數の佛智を具す、斯れ乃ち一佛一衆生の德なり。（教王經開題）

一九三

法界の淨心は十地を超えて以て絶絶たり、一如の本覺は三身を孕んで離離たり、況んやまた曼荼の性佛は圓圓の又の圓、大我の眞言は本有の又の本なり、風水の龍其の波瀾を動ずることを得ず、業轉（ゴッテン）の霧其の赫日を蔽すこと能はず、恒沙の眷屬は鎭（トコシナ）へに自心の宮に住し、無盡の莊嚴は本初の殿に優遊す。（大日經開題）

一九四

一阿の本初は性眞の愛を吸うて始なく、金蓮の性我は本覺の日を孕んで終なし。

（性靈集七）

一九五

智は能く物を照すに功あり、理は則ち攝持して亂るゝことなし、攝持の故に大身法界を孕んで外なく、光照の故に廣心虚空を呑んで中なし、理智他に非ず、卽ち是れ我が身心なり。

（性靈集八）

一九六

色を以て心を攝すれば心は則ち所攝なり、心を以て色を攝すれば心は則ち能攝なり、色心名別なれども並に是れ一體なり。

（梵網經開題）

一九七

多にして不異なり、不異にして多なり、故に一如と名づく、一は一に非ずして一なり、無數を一となす。

（吽字義）

一九八

無生は是れ正性にして、無相は實相を成ず。

（宗祕論）

一九九

阿の聲は何の名をか呼ぶ、法身の名字を表はす、卽ち是れ聲字（シャウジ）なり、法身は何の義かある、謂はゆる法身とは諸法本不生の義、卽ち是れ實相なり。

（聲字義）

二〇〇

眞如實相は法然の理、常恒の法なり、因緣生に非ず、是の故に眞如は因に非ず實相は果に非ず。

（金剛頂經開題）

二〇一

此の太虛に過ぎて廣大なるは我が心、彼の法界を越えて獨尊なるは自佛なり、佛刹微塵の數も其の數量に譬ふること能はず、日月摩尼の光も其の光明に喩ふることを得ず、修行を待たずして淸淨覺者本より具し、勤念を假らずして法然の薩埵自ら得たり、五智の尊其の根首に居し、四曼の德其の枝末を攝す、如如如如の理、空空空空の智の如きに至つては、足斷へて進まず手亡じて及ばず、奇なるかな曼荼羅、妙なるかな三密。

（平城天皇灌頂文）

二〇二

六大無碍にして常に瑜伽なり、四種曼荼各〻離れず、三密加持すれば速疾に顯る、重重帝網なるを卽身と名く、法然に薩般若を具足して、心數心王刹塵に過ぎたり、各〻五智無際智を具す、圓鏡力の故に實覺智なり。

（卽身義）

迷界品

二〇三

佛身の裡に地獄を見、七寶の上に玉を看ず。

（性靈集一）

二〇四

三界六道長く一如の理に迷ひ、常に三毒の事に醉つて幻野に荒獵して歸宅に心なく、夢落に長眠す、覺悟何れの時ぞ。

（吽字義）

二〇五

凡夫は名聞利養資生の具に執着して、いとなむに安身を以てし、恣まゝに三毒五欲を行ず。

（菩提心論）

二〇六

世俗を顧み惟れば、貪慾に纏縛せられて心意を煎迫し、愛鬼に羈

糜せられて精神を燋灼す、朝夕の食を營み夏冬の衣に勞す、浮雲の富を願つて如泡の財を聚め、不分の福を邀めて若電の身を養ふ、微樂朝に臻れば天上の樂を唉ひ、小憂夕に迫れば塗炭に沒するが如し、娛曲未だ終らざるに悲引忽ちに逼る、今は卿相たれども明は臣僕となる、始めは鼠上の猫の如く終りは鷹下の雀たり、草上の露を恃んで朝日の至ることを忘れ、枝端の葉を憑んで風霜の至ることを忘る、あゝ痛むべきかな

（三教指歸中）

二〇七

身は生死の縛に纏はれ、心は愛欲の河に溺る。

（教王經開題）

二〇八

苦海に沈淪し生死の河に沒して、自心の源に迷ひ惠命を喪失す。

（三昧耶佛戒儀）

二〇九

愛水諸根を溺らし、迷心煩惱を長じ、地獄自ら經營す、豈に是れ他人の造るならんや。

（宗祕論）

二一〇

磁石鋼を吸へば剛柔馳せ逐ひ、方諸水を招けば父子相親む、父子の親親たる、親の親たることを知らず、夫婦の相愛たる、愛の愛たることを覺らず、流水相續き飛燄相助く、徒らに妄想の繩に縛られて、空しく無明の酒に醉へり、既に夢中に過へるが如し、還

て逆旅(ゲキリコ)に逢ふに似たり。

二二一

生れ生れ生れ生れて生の始に暗く、死に死に死に死に死んで死の終に冥し。

（寶鑰上）

二二二

我を生ずる父母も生の由來を知らず、生を受くる我が身もまた死の所去を悟らず、過去を顧みれば冥々として其の首めを見ず、未來に臨めば漠々として其の尾(ヲハリ)を尋ねず。

（寶鑰上）

二二三

三辰頂に戴けども暗きこと狗の眼に同じく、五嶽足を載れども迷へること羊の目に似たり、日夕に營營として衣食(イシ)の獄に繫がれ、遠近に趁(ワシ)り逐つて名利の坑(アナ)に墜つ。

（寶鑰上）

二二四

朝な朝な夜な夜な衣食の奴に勞し、歳歳月月(トシ ツキ)恩愛の繩に繫がる、心肝父に離れ母に離るゝ哭に爛れ、涕淚偶を喪ひ子を喪ふ悲に溢(アフ)る。

（性靈集八）

二二五

味を嗜む者は生命を殺して腹に塡て、財を貪る者は他物を奪つて衣食す、色に耽る飛蛾は炎を拂つて身を滅ぼし、酒を好む猩猩は瓮の邊(ホト)りに縛せらる。

（寶鑰中）

二一六

心海湛然として波浪なし、識風皷動して去來を爲す、凡夫は幻の男女に眩著し、外道は蜃の樓臺を狂執す、自心の天獄たることを知らず、豈に唯心の禍災を除くことを悟らんや。

（寶鑰下）

二一七

如幻の醉客は無明の暗室に眠昏して長夜の曉けがたきことを憂へ、如夢の貧商は妄想の寒里に跲廻して暖春の遲く來ることを傷む。

（大日經開題）

二一八

二十九の邪計の磐石に礫砢たるを以て人皆家内の伏藏を知らず、百六十の妄執の毒醴に染醉して世を擧つて衣裏の寶珠を忘棄す。

（大日經開題）

二一九

夢鄉の幻客は妄波に飄つて常樂の神都を辭し、泡身の盲子は業馬に策ちて以て苦空の曠野に戲る、陽燄を逐ひて以て歸ることを忘れ、空華を攀ぢて而も逸蕩す、豈に知らんや水月眞像に非ず蜃樓是れ假家なることを、四蛇の我を害するに驚かず、六賊の己れを寇するを怖れず、無明酕酗して三毒昏昏たり、不因害風邪鬼狂言して佛心卽ち我が心我が身佛身を離れずと知らず、空しく寶珠を懷いて貧里に跲跰し、徒らに醍醐を韞んで常に毒藥を服す。

二二〇

曾て三身の己れに在ることを知らず、誰か四德の我有なることを覺らん、還源の思ひ已に忘れ、返本の情すべて失へり、日日に生死の苦因を營み、夜夜に無明の業果を增す、狂醉厚深にして覺悟日なし。

（大日經開題）

二二一

妄風鼓して海水躍り、暗雲涌いて虛霧霾る、夢虎三界の區に森羅し、空華四生の宅に照灼す、我我の執彌〻其の根を固くし、有有の迷重りて其の葉を繁くす、三重妄執の心大日の光を蔽し、四倒實有の思滿月の面を蔭ふ、狂醉して驚かず三途の患熾然たり、沈眠して覺らず三有の火蔓延たり。

（最勝王經開題）

二二二

十惡の波浪は心原に動き易く、萬善の枝葉は意樹を抽くこと難し。

（平城天皇灌頂文）

二二三

此に死し彼に生じ生死の獄出で難く、人となり鬼となつて病苦の怨招き易し。

（宗祕論）

二二四

悲しいかな悲しいかな三界の子、苦しいかな苦しいかな六道の客、

（性靈集八）

善知識善誘の力、大導師大慈の功に非ずよりんば、何ぞ能く流轉の業輪を破つて常住の佛果に登らん。（性靈集八）

二二五

浮華名利の毒に慢（オゴ）ること莫れ、三界火宅のうちに燒かるること莫れ、斗藪（トソウ）して早く法身の里に入れ。（性靈集一）

明暗品

二二六

心暗きときは卽ち遇ふ所悉く禍（ワザワイ）なり、眼明かなるときは則ち途に觸れて皆寶なり、如來は之を覺つて萬德の殿に優遊し、衆生は之に迷うて三途の獄に沈淪す。

（性靈集八）

二二七

過（トガ）をなすものは暗、福をなすものは明なり、明暗偕（トモ）ならず、一は强く、一は弱し、覺智にして强きときは則ち萬德圓（マドカ）なり、愚迷にして弱きときは則ち千殃（オカ）侵す。

（性靈集八）

二二八

黑暗は生死の源、遍明は圓寂の本なり。

（性靈集八）

二二九

覺れるを諸佛と名け、迷へるを衆生と名く、衆生癡暗にして自ら覺るに由なし。

（理觀啓白文）

二三〇

衆生は悟らずして長夜に苦を受け、諸佛は能く覺りて常恒に安樂なり。

（平城天皇灌頂文）

二三一

自心に迷ふが故に六道の波皷動し、心原を悟るが故に一大の水澄靜なり、澄靜の水萬像を影落し、一心の佛諸法を鑒知す。

（寶鈔下）

二三二

一切の相を取らざれば業海波浪なし、若し我人の心を執れば唯だ無明の壯なるを益す。

（宗祕論）

二三三

彼の無智の畫師自ら衆綵を運んで可畏夜叉の形を作し、成し已つて還つて自ら之を觀て心に怖畏を生じて頓ちに地に躄るゝが如く、衆生もまた復是の如し、自ら諸法の本源を運んで三界を畫作して還つて自ら其の中に沒し、自心熾然にして備さに諸苦を受く、如來有智の畫師は既に了知し已つて卽ち能く自在に大悲漫荼羅を成立す。

（吽字義）

無常品

二三四

無常の暴風は神仙を論ぜず、精を奪ふ猛鬼は貴賤を嫌はず、財(タカラ)を以て贖(アガナ)ふこと能はず、勢を以て留むることを得ず、壽を延ぶる神丹千兩服すと雖も、魂を返す奇香百斛(コク)ことごとく燃すとも、何ぞ片時を留めん、誰か三泉を脱(マヌカ)れん。（三教指歸下）

二三五

飄埃(ヘウアイ)の脆き體は機散の朝には春の花と與んじて繽紛(ヒンプン)たり、翔風(シヤウフウ)の假りの命は緣離の夕には秋の葉と共んじて紛紜たり。（三教指歸下）

二三六

生は昨日の如くなれども霜鬢(サウヒン)忽ちに催す、強壯は今朝、病死は明

夕なり、徒らに秋葉の風を待つの命を恃んで、空しく朝露の日を俟つの形を養ふ、此の身の脆きこと泡沫の如く、吾が命の假なること夢幻の如し。

（教王經開題）

二三七

無常の風忽ちに扇（アフ）げば四大瓦のごとくに解け、閻魔の使（クチマ）乍ちに來れば六親誰をか馮（タノ）まん。

（教王經開題）

二三八

一身獨り生歿す、電影是れ無常なり、鴻燕かはるがはる來り去り、紅桃昔の芳を落す、華容年の賊（ヌスビト）に偷（ヌス）まれ、鶴髪禎祥ならず、古の人今見えず、今の人何ぞ長きことを得ん。

（性靈集一）

二三九

三界の縁生は幻化の如くにして留らず、四生の因起は電泡の如くにして卽ち滅す、聖も免れず、いかに況んや凡夫をや。

（性靈集八）

二四〇

隆崇として頂見えざるは妙高、渺漫（ベウマン）として底知ることなきは溟渤（メイボツ）なり、毗嵐（ビラン）一たび發すれば自ら埃塵となり、日輪七つ重なればことごとく皆涸燥す、世上の强鎭すら共れかくの如し、人間何物か常に存すべき、十號の如來も滅を林中に唱へ、三明の聖者も悲を河邊に起す、いかに況んや凡庶の類誰か久しく保たん、霜露の質

何ぞ永く存せん。

二四一

堯舜禹湯と桀紂と、八元十亂と五臣と、西嬙嫫母支離の醴、誰か能く萬年の春を保ち得たる、貴き人も賤しき人もすべて死に去んぬ、死に去り死に去つて灰塵と作んぬ、歌堂舞閣は野狐の里、夢の如く泡の如し。

（性靈集一）

二四二

露珠荷の上に翻れ、霜鍾枝の下に散ず、紗窓の朝の鏡忽ちに照覽の影を失ひ、羅帳の夕の燈空しく心を燒くの焰を餘す、嗚呼哀しいかな、嗚呼哀しいかな、千たび生死の夢を空じ萬たび陽炎の假

（性靈集八）

なることを觀ずと云ふと雖も、天性の悲しみ感じ易く、鍾愛の哀しみ抑へ難し。

（性靈集八）

二四三

覺りの朝には夢虎なく、悟りの日には幻象なしといふと雖も、然れどもなほ夢夜の別れ不覺の淚に忍びず、巨壑半ば渡つて片檝忽ちに折れ、大虛未だ凌がざるに一翎乍ちに摧く、哀れなるかな、哀れなるかな、悲しいかな、悲しいかな、重ねて悲しいかな。

（性靈集八）

二四四

秋の黃葉繽紛として終に枝に返るの期なし、夏の蓮華萎み落ちて

豈に臺に託くの期あらんや、ここに知りぬ、會ひ難うして別れ易きは慈親の芳儀、去り易うして留り難きは恩愛の香ばしき中なり。

（性靈集八）

二六〇

二四五

腸を斷ちて玉を埋め、肝を爛らして芝を燒く、泉扉永く閉ぢぬ、天に愬ふれども及ばず、荼蓼嗚咽して火を呑んで滅えず。

（性靈集二）

二四六

因果相感ずること宛も聲響の如し、業緣唱和すること還て形影に均し、生緣聚るときは則ち春苑の華も其の咲めるに譬ふるに足らず、死業至るときは則ち秋林の葉も何ぞ其の悲しみに喩ふること を得ん、一たびは生じ一たびは死して人をして苦樂の水に溺れしむ、乍ちに離れ乍ちに沒して幾許くか人間の腸を絶つ。

（性靈集八）

恩

德

品

二四七

空海恩澤に沐せしより力を竭して國に報ずること歳月既に久し、常に願ふらくは蚊虻の力を奮つて海岳の德に答へんと。（中略）生々に陛下の法城となり、世々に陛下の法將とならん。

（性靈集九）

二四八

我を覆ひ我を載するは仁王の天地なり、目を開き耳を開くは聖帝の醫王なり、報ひんと欲し、答へんと欲するに極まりなく際（キハ）なし。

（性靈集四）

二四九

高天覆はざれば人民何ぞ生ぜん、厚地載せざれば草木誰にか憑らん、所生の尤靈(イウレイ)なる惟れ人を貴とす、貴きの原は惟れ君惟れ王、君は是れ人の父、民は則ち君の子、子の病癒えざれば父何を以てか安んぜん。

（拾遺雜集）

二五〇

夫れ此の身は虛空より化生せるにもあらず、大地より變現せるにもあらず、必ず四恩の德に資(ヨ)りてこの五陰(ゴオン)の體を保つ、謂はゆる四恩とは一には父母、二には國王、三には衆生、四には三寶なり。

（性靈集八）

二五一

我を生み我を育つるは父母の恩、天よりも高く地よりも厚し、身を粉にし命を損しても何れの劫(トキ)にか報ずることを得ん。

（性靈集八）

二五二

父母我を生むといふと雖も、若し國王なくんば强弱相戰ひ、貴賤劫奪して身命保ち難く、財寶何ぞ守らん。

（性靈集八）

二五三

衆生我に於いて何の恩德かある、吾は是れ無始より已來(コノカタ)四生六道の中に父となり子となり、何の生をか受けざる、何の趣にか生ぜざる、若し慧眼を以てこれを觀ずれば一切の衆生は皆是れ我が親

なり、この故に經に云く、一切の男子は是れ我が父、一切の女人は是れ我が母、一切衆生は皆是れ吾が二親師君なりと。

（性靈集八）

二六八

二五四

生死の苦を斷じ涅槃の樂を與ふるは三寶の德なり。

（性靈集八）

二五五

經の中に佛、恩處（オンジョ）ありと說きたまふ、其の四種あり、父母、國王、衆生、三寶なり、父母は則ち我を生じ我を哺（ホ）するの功厚地に過ぎたり、國王は則ち我を安んじ我を貴うするの德高天に逾えたり、衆生は則ち三世の達親皆是れ考妣なり、三寶とは佛法僧なり、佛は能く我が生盲を開き險夷を導き示す、法は能く我に甘露を沃いで熱惱を除去す、僧寶の中に二種あり、菩薩と聖僧となり、四攝を以て我が迷を引き四量を以て我が醉を醒す。

（性靈集八）

二五六

父母覆育して提挈（テイケイ）慇懃なり、其の功を顧れば高きこと五岳に並び、其の恩を思ふに深きこと四瀆（シトク）に過ぎたり、骨に鏤（チリバ）め肌（ハダヘ）に銘ず、誰か敢て遺忘せん、報ぜんと欲するに極りなし、反さんと欲するに尤も至（アツ）し。

（三敎指歸下）

二五七

恩河深うして底なく、德山峻（タカ）うして天を衝（ツ）けり。林烏なほ反哺を知

る、尤霊豈に遺忘せんや。尼父は其の終を愼むことを誡め、金仙は其の棺を擔ふことを示す、忘れ難く報じ難きは、其れ只だ嚴父の徳なり。

（性霊集八）

二五八

二親の恩は身を粉にしても報じ難く、嚴君の徳は命を殞しても酬ひがたし。

（性霊八集）

二五九

昧金の面を照らす必ず瑩拂を待ち、童矇の眼を開く定めて師訓に因る、然れば則ち恩の重きは師徳を最とす。

（性霊集八）

二六〇

迷心を照すに智燈を以てし、智身を長ずるに法食を以てし、三界の苦因を拔き四徳の樂果を與ふるが如きに至つては、大師の恩廣くして際なく、大悲の徳高くして頂なし、則ち知んぬ沐し易くして報じ難く暫く受けて永く逸きは嚴師の功か、

（性霊集八）

二六一

師資の道は父子よりも相親し、父子は骨肉相親しと雖もたゞ是れ一生の愛にして生死の縛なり、師資の愛は法の義を以て相親み世間出世間に苦を拔き樂を與ふ、何ぞ能く比況せん。

（弘仁御遺誡）

二六二

三世の如來、十方の菩薩は四恩の徳を報じて悉く菩提を證す。

二六三

經を讀み佛を禮して國家の恩を報じ、觀念坐禪して四恩の德に答ふ。

（性靈集八）

二七二

二六四

我をば息惡修善の人と名く、法界を家となして恩を報ずる賓なり。

（寶鑰中）

二六五

毎（ツネ）に國家のために先づ冥福を廻らす、二親一切に悉く陰功を讓る、此の慧福を總べて忠となし孝となす。

（性靈集一）

（三敎指歸下）

二六六

晝夜に眞言を誦じて塵滴を聖化に添へ、日夕に金仙を禮して寶壽を山嶽に延べん。

（性靈集四）

二六七

豈に若かんや、香を燒き佛を念じて形を一室に老い、華を散じ經を講じて心を三密に運ばし、國恩を枯木に報じ冒地を死灰に求めんには。

（性靈集四）

二六八

膚寸南北に心なけれども風に遇ふときは則ち飛ぶ、順の德なり、人臣東西に心なけれども命を銜（フク）むときは則ち馳す、忠の至なり。

二七三

二六九

天の簡君に在り讓るべからず、家を忘れて國の爲にするは是れ忠臣なり。

（性靈集三）

二七〇

心慈悲に住し、思忠孝に存す。

（性靈集三）

二七一

善いかな親のために家を出で形を毀ひて無我にして以て幽難を拔濟す、是れ孝が中にまた孝あるなり、君のために道を思ひ、血を吐き、倦むことを忘れて鴻業を潤色す、是れ忠の外に別に忠あるなり。

（性靈集十）

二七二

林鳥の微禽すら反哺の志あり、泉獺の愚獸すら祭魚の誠を致す、いかに況んや天性の孝感じ易く、罔極の恩答へ難し、十力を屈して棺を擔ひ、六通に乘じて鉢を饋るが如きに至ては大孝の稱こゝに顯る、德に酬ふるの理、誰か敢て遺れんや。

（理趣經開題）

（略付法傳）

閑

林

品

二七三

閑林に獨坐す草堂の曉、三寶の聲一鳥に聞く、一鳥聲あり人心あり、聲心雲水俱に了了。

（性靈集十）

二七四

空海、弱冠より知命に及ぶまで、山藪を宅（イヘ）と爲し禪默を心とす。

（性靈集四）

二七五

禪經の說に准ずるに、深山の平地尤も修禪に宜し、空海少年の日、好んで山水を涉覽して、吉野より南に行くこと一日、更に西に向つて去ること兩日程にして、平原の幽地あり、名けて高野と曰ふ、

計るに紀伊の國伊都の郡の南に當れり、四面高嶺にして人蹤蹊絶えたり、今思はく上は國家の奉爲に、下は諸の修行者の爲に、荒藪を芟り夷げて、聊か修禪の一院を建立せんと。

（性靈集九）

二七六

此の勝地に託て聊か伽藍を建てゝ金剛峯寺と名く、此に住して道を修し四上持念す、華藏を心海に觀じ、實相を此の山に念ず、以て神威を崇め國皇の福を饒かにせん。

（性靈集九）

二七七

斗藪して道に殉ひ兀然として獨坐せば、水茶能く命を支へ薜蘿是れ吾が衣なり、修する所の功德を以て國德を酬ふ。

（高野雜筆集上）

二七八

澗水一坏朝に命を支へ、山霞一咽夕に神を谷ふ。

（性靈集一）

二七九

山鳥時に來つて歌つて一たび奏す、山猿輕く跳んで伎倫に絶えたり、春の華秋の菊笑んで我に向ひ、曉月朝風情塵を洗ふ。

（性靈集一）

二八〇

孤雲定れる處なし、本より高峰を愛す、人里の日を知らず、月を觀て青松に臥せり。

（性靈集一）

二八一

容を禪關に凝らし、神を定水に洗ふ、烟霞を吸うて年を送り、山林に對して歸らんことを忘る。

（高野雜筆集上）

二八二

空海山に入りてよりこのかた、都べて人事を絶却し臨池を屑（カヘリ）みず、寸陰是れ競ひて心佛を攝觀す、夢中の俗事坐忘を貴しとす、所以に非意に忘却して今に書せず。

（高野雜筆集上）

二八三

林泉未だ飽かず迹を人間に絶つ、逸遊に限られて數〻詣でゝ展謁することを遂げず、悚息極めて深し、望むらくは故怠に非ざるを

恕せよ。

（高野雜筆集下）

二八四

閑靜を貪らんがために暫く此の南峯に移り住す、雲樹隔つと雖も心通何ぞ遠からん、三時持念して事ごとに福を廻らす。

（高野雜筆集下）

二八五

默念せんがために、去月十六日此の峯に來り住す、山高く雪深くして人迹通じ難し、限るに此の事を以てして久しく消息を奉せず。

（高野雜筆集下）

二八六

吾れ此の山に住して春を記せず、空しく雲日を觀て人を見ず、新羅の道者幽尋の意、錫を持して飛び來ること恰も神に似たり。

（拾遺雜集）

廻向品

伏して願くは此の法水を沃(ソヽ)いで先皇を浴し奉る、五雲は一諷の口に蕩け、兩曜は一念の心に揭げん、覺月の殿に優遊し、慧日の觀に放曠せん、太上天皇、超然として一を守つて姑射(コヤ)に歸らんことを忘れ、脫躧(ダツシ)して神を谷(ヤシナ)つて汾河に般樂したまはん、今上陛下、體は金剛に練し壽は石劫よりも堅からん、無爲垂拱にして北辰の天長に爭ひ無事明哉にして南嶽の地久に將(トモ)なはん、世子盤石にして股肱良哉ならん、四門穆穆(ボクボク)として多士濟濟たらん、國風澹朴(タンボク)にして時雨平(ヒト)しく施さん、人は其の親を親とし家は其の子を子とせん、百穀畝に盈ち萬民街(チマタ)に滿たん、三界を牢籠し四生を綿絡して、

同じく愛獄を脱して齊しく覺道に遊ばん。

二八八

伏して願くは此の法水を沃いで彼の瑩靈を洗はん、性蓮乍ちに發けて微塵の心佛を顯はし、心法忽ちに開けて恒沙の遍智を證せん、福　聖躬に廻らして現當に餘りあらん、衆と生との所遍の刹、情と非との所在の衆、大肚を豁かんじて懷含し、鴻藏を開いて以て亭毒せん、同じく鑁乳の味に飽いて齊しく阿字の閣に遊ばん。

（性靈集六）

二八九

仰ぎ願くは四智の法帝、五大忿王、十護の諸天、八部の靈神、智劍を揮つて以て黔黎の業を斷ち、通輪を馳せて以て蒼生の障を摧きたまへ、燕舞を勞せずして畎澮滂沱し、鸛唳に因らずして川溪汎溢せん、畝に餘粮有つて路に遺ちたるを拾はず、野老は帝の力を知らず、家嬰は悉く王乳に飽かん、首股明良なること豈に只だ蘘の辰のみならんや、庶事康哉なること當に今日に見つべし、然して後に三界法水に沐し、六趣甘露に飽き、同じく愛纏を出でて共に覺道を成ぜん。

（性靈集六）

二九〇

仰ぎ願くは　皇帝陛下、金輪四天に轉じ、智劍三障を斫かん、魔軍面縛して海内波なく、人は知足に等しく壽は有頂に同じからん、

太上天皇藐山の逸樂、契桃椿よりも久しく、汾河の般興、期芥石よりも永からん、關鳩甡甡として鳳閣瓞瓞たらん、瓊柯玉葉、武傑文雄、勞を日月の明に盡し、譽を山河の盟に流さん、十一の生類無餘に入れて度せず、九種の譬劍有爲を破して住まることなからん、愛溺を此の涯に忘れて、慧撥を彼の岸に捨てん。（性靈集六）

二九一

伏して願くは此の勝業に籍つて煢魂を拔き翊けん、金翅を空空に持し、蓮歩を如如に攀ぢん、珍寶日に新にして山壽窮りなく、股肱良哉にして元元康哉ならん、幽顯福を同うして併しながら本有の五鏡を鑒み、當さに佛護に沐して鎭へに法苑に遊ばん。

二九〇

二九二

伏して乞ふ此の善業に籍つて四恩を翊け奉り、覺苑に優遊して禪林に放曠せん、毛鱗角冠、蹄履尾裙、有情非情、動物植物、同じく平等の佛性を鑒みて忽ちに不二の大衍を證せん。（性靈集六）

二九三

伏して願くは此の妙業を以て彼の神威を崇めん、金剛の慧日は愛河を銷竭し、實相の智杵は邪山を摧碎せん、自他平等にして妄執を斷割し、怨親齊しく沐して轉禍爲福せん、三有六途は皆悉く四恩なり、鼓行蝡動何ぞ佛性なからん、遍く平等の法雨を灑いで早

（性靈集六）

く妙覺の根果を熟せしめん。

（性靈集六）

二九二

二九四

聊か法筵を設けて三尊を禮供す、諷音遠く徹して馬頭を摧伏し、香氣遙かに薫じて象王を仰ぎ奉らん、妄雲性空に褰げて覺月心秋に朗かならん、香を執れば自ら馥し衣を洗へば脚淨し、福現衆に延いて鼠の侵さんことを怕ぢざらん、壇りなき福履天長地久ならん、鱗衫羽袍、蹄烏角冠、誰か佛性なからん早く實相を見せしめん。

（性靈集六）

二九五

伏して願くは斯の功業を廻らして佛恩を報じ奉り、國家を擁護し悉地を尅證せん、刹は妙樂の刹に均しく、人は不變の人に同じからん、若しは貴若しは卑或は道或は俗、財を捨て力を效すの績、筆を揮ひ針を投ずるの營、木を伐り水を汲み饍を設け味を調へ、心を舉げて隨喜し合掌して低頭し、讃毀見聞、親疎恩怨、五大の遍ずる所、心識の在る所、阿字を本初に悟つて三寶を三密に覺り、鏤文を無終に解して五界を五智に知らん、法爾の莊嚴豁然として圓かに現じ、本有の萬德森羅として頓に證せん。（性靈集七）

二九六

伏して願くは此の良緣に籍つて尊靈を翊け奉り、覺月を心臺に朗かんじ、慧日を蓮宮に曜かさん、廣く無際を羅めて普く不生に入

らしめん。

二九七

伏して願くは此の妙業に籍つて先慈を翊け奉らん、月鏡盈盈として忽ちに金剛の月殿に逍遙し、日輪赫赫として速かに蓮臺の日宮に放曠せん、鱗衣蹄履、角矛牙劍、排上潛下、怨親疎昵、同じく鏤乳の珍味に飽いて齊しく阿字の寶閣に登らん。

（性靈集七）

二九八

伏して願くは斯の良緣に籍つて萬が一を奉答せん、百億の能仁は手を乘華の遊に授け、一大の淨滿は頂を無生の樂に摩でたまへ、戲論を空空に滅し、寂靜を如如に證せん、北極垂拱して南風愠を解かん、關雎鵲鳩、鳳樓虎爪、力を蕩蕩の化に竭し、潤を巍巍の風に蒙らん、上有頂を絡ひ下無間を籠めて、同じく三障を斷じて齊しく一道に入らしめん。

（性靈集七）

二九九

伏して願くは智燈日に代つて融山の容圓かに現じ、長夜に雲を褰げて黑暗の心忽ちに銷せん、普く法界を照して五眼を自他に朗かにし、廣く幽明に被らしめて六通を物我に證せしめん。

（性靈集七）

三〇〇

伏して願くは此の法力を以て先靈を開悟せん、妙偈加持して早く

知見の源を證し、沒駄護念して速かに本覺の殿に遊ばん、有情の業壽この日永く斷ち、菩提の智牙この辰いよいよ布せん。（性靈集七）

三〇一

伏して願くは大慈捨てず惟馨を納受したまへ、大小功を添へ尊卑力を效すもの同じく積霧を褰げて朗かに曼荼を見ん。（性靈集七）

三〇二

伏して願くは此の介福を廻らして彼の鴻恩を報いん、聖天天長后地地久ならん、春儲山海のごとく百工松竹のごとくならん、九世の恃怙、四生の耶孃、三力加持し六通先導して、早く有結を脱れ

頓に無漏に入らん、弟子等、識海浪靜かにして念室暗消え、五眼蓮のごとくに開け三點月のごとく圓かならん、傍に動物を羅め廣く含靈を覆ひて、同じく有有の區を出でて、早く如如の境に入らん。（性靈集七）

三〇三

伏して願くは斯の白業を以て四恩に答へ奉らん、逝く者は化して金剛の躬となり、留る人は變じて如意の身とならん、共に二利を圓かんじて同じく一道を證せん、竪には五類に及ぼし横には四生を沾ほして、早く愛河を超えて速かに智海に入らしめん。（性靈集七）

三〇四

伏して願くは斯の寶輅を馳せて先慈を駕し奉らん、字字の法身盈盈たる月曜を引き、句句の本尊爀爀たる日光を熾んにせん、智鏡を心臺に懸け、醍醐を寶殿に嘗めん、十世の四恩、萬方の六趣、有頂無間、鱗服羽衣、氣を吐き身を保ちて長眠永醉せるもの、同じく我我の幻炎を覺つて、頓に如如の實相に入らしめん。

（性靈集七）

三〇五

此の德海を翻じて四恩を洗滌せん、三障霧のごとくに卷き四智月のごとくに朗かならん、溺海を超越して寶岸を躋り攀ぢん、國は鬱單よりも隆んに人は非想よりも壽からん、九野を絡ひ羃め十方を牢籠して、蠉飛蠕動、毛鱗牙角、共に平等の智水に沐して、不染の蓮藏に優遊せん。

（性靈集七）

三〇六

伏して願くは此の德海を傾けて梵魂を潤洗せん、妄霧を褰げて以て大日を覩、智鏡を懷いて以て實相を照さん、法の不思議これを用ひて窮盡なからん、福現親に延いて壽考光寵ならん、臣子善あれば必ず所尊に奉ず、此の勝福を廻らして聖朝に酬ひ奉り、金輪常に轉じて十善彌〻新ならん、春宮瓊枝、宰輔百工、共に忠義を竭し福履これを綏んぜん、五類の提婆、十方の數生、同じく一味の法食に飽いて、等しく一如の宮殿に遊ばん。

（性靈集七）

三〇七

伏して願くは此の良縁に乗じて彼の煢魂を資(タス)けん、法雷は永蟄(チツ)の佛性を驚かし、甘露は樹王の根葉に灑(ソ)がん、覺眼を除蓋に開き、心月を定觀に朗かんぜん、五大の所造、一心の所遍、鱗角羽毛の郷、飛沈走躍の縣、同じく四生の愛輪を破して、共に一眞の覺殿に入らん。

（性靈集八）

三〇八

伏して願くは此の善業に乗じて彼の逝煢(セイケイ)を運ばん、心蓮を八池に發(ヒラ)き、覺蘂(カクズキ)を九殿(キウデン)に開かん、法界はすべて是れ四恩なり、六道誰か佛子に非ざらん、怨親を簡はず、悉く本覺の自性に歸らしめん。

（性靈集八）

三〇九

伏して願くは此の介福を廻らして、五天は彼の白牛(ビヤクゴ)の寶軒に乗り、六趣は此の黒羊の弊車を乗てん、善を廻らす施主は禍を轉じて福となし、常に佛護に沐して鎭へに法苑に遊ばん。

（性靈集八）

三一〇

伏して願くは此の勝功を廻らして彼の恩德を報ぜん、金杵(キンシヨ)を擲つて障嶽を摧き、慧日を轉じて愛河を竭さん、高く法界の殿に臨み、深く眞如の底を察せん、牙劍角矛、羽裳鱗衣、夢郷の幻士、影縣の編戸、同じく長眠を覺まして、共に一味の甘露を嘗めん。

三一一

伏して願くは此の妙業に籍りて梵魂を濟拔せん、五智は赫日の容を顯はし、三部は坐月の貌を現じ、本有の莊嚴を見、妙覺の理智を證せん、先考一實に如如に契ひ、先妣十力を智智に得ん、無明黑暗の鄉(サト)、妄想顚倒の宅(イヘ)、同じく心佛の光明を照らして、共に慧炬の熾炎を焚かん。

（性靈集八）

三一二

伏して願くは此の善業に籍りて梵魂を翊け奉らん、三十七聖、足を本誓に濡ほし、一乘の甘露、頂に佛種を灌がん、慧眼を開いて

不生を見、心蓮を敷(ヒラ)いて圓鏡を鑑みん、法水汲んで盡くることなく、佛力用ひて窮らざらん、無盡の法水を灌いで無邊の有情を沐し、共に長夜の迷室を照らして、早く常樂の覺路に遊ばん。

（性靈集八）

三一三

伏して願くは斯の白業を擧げて彼の四恩に沃がん、六大の遍ずる所皆是れ我が身なり、十界の有る所並びに是れ我が心なり、虛空を盡し法界を洞(ホガラ)かんじて、同じく一味の醍醐に飽き、齊しく三點の覺苑に登らん。

三一四

仰ぎ願くは金剛界會の三十七尊、大悲胎藏四種曼荼、入我我入の故に、六大無碍瑜伽の故に、塵數の眷屬と與に無來にして來り、海滴の分身と將に不攝にして攝したまへ、五智本有の殿を開き、九尊性蓮の宮を授けたまへ、法界に都して帝と稱し、塵刹に遍じて民を撫せん、有情の所攝、無明の所持、同じく此の理を悟りて速かに自覺を證せん。

（性靈集八）

三一五

此の白業を惣べて聖體に資し奉る、伏して願くは教令の五忿、輪劍を揮つて魔怨を降し、自性の十六、惟寶を麾いて福壽を滋くせん、洪祚永永にして芥石を猶短きに咍り、玉體堅密にして金剛を

滅え易きに咲はん、十善の風四天に扇いで以て條を鳴らさず、萬民の廩九年を貯へて以て遺を拾はず、其の帝力を忘れて其の垂拱を悟らん、上は七廟に福ひして彼の三明を益さん、永く無明の根を拔き、常に大覺の觀に遊ばん、太上天皇、姑射の遊八仙と與んじて其の極りなく、襄城の德千葉と將んじて其の芳を流さん、震位貳君、名は文王世子に齊しく、德は悉陀薩埵に比せん、監國の譽彌新にして、紹構の功墜ちず、宮貴美を飛ばして文武能を效さん、北極を繞つて力を竭し、南風を仰いで慍を解かん、鼎食餘あつて冠帶盡くることなけん、普く幽明を潤ほし廣く動植に及ぼし、共に般若の甘露に沐して、同じく解脫の蓮臺に昇らん。

三一六

仰ぎ願くは斯の光業(クワウゴフ)に籍(ヨ)りて自他を拔濟せん、無明の他忽ちに自明に歸し、本覺の自乍ちに他身を奪はん、無盡の莊嚴、大日の慧光を放ち、刹塵の智印、朗月の定照を發かん、六大の遍ずる所、五智の含ずる所、排虚沈地、流水遊林、すべて是れ我が四恩なり、同じく共に一覺に入らん。

（性靈集八）

三一七

伏して乞ふ諸の檀越等、各〻一錢一粒の物を添へて、斯の功德を相濟へ、然れば則ち營む所の事業不日にして成り、生ずる所の功德萬劫にして廣からん、四恩は現當の德に飽き、五類は幽顯の福を饒(ユタ)かにせん、同じく無明の鄕(サト)を脫して、齊しく大日の殿に遊ばん。

（性靈集八）

拾

遺

三一八

幽蘭心なけれども氣遠く、美玉深く居て以て價貴し。（高野雜筆集上）

三一九

大山德廣ければ禽獸爭ひ歸し藥毒雜り生ず、深海道大なれば魚鼈（ギョベツ）集まり泳ぎ龍鬼並び住む。（寶鑰中）

三二〇

大虛心なれども萬有これに容る、大地念（オモヒ）なけれども百草これより出づ。（寶鑰中）

三二一

富人は呼ばざれども貧人集り、智者はこれを默せども童朦聚る。

三一二

（寶鑰中）

赫赫たる弘陽輝光煽りに朗かなれども、然れども盲瞽の流は其の曜を見ず、磑磑たる霹靂震響猛く勵しけれども、然れども聾耳の族は彼の響を信ぜず。

（三教指歸中）

三一三

短き綆の水を汲む、疑を井の涸れたるに懐き、小き指の潮を測る、猶し底の極れるかと謂へり。

（三教指歸中）

三一四

蟭螟は大鵬の翼を見ず、蜈蚣何ぞ難陀が鱗を知らん、蝸角は穹昊の頂を衝くことを得ず、僬僥何ぞ能く溟渤の底を踐まむ、生盲は日月を見ず、聾聵は雷鼓を聞かず、愚少の分蓋し此の如し。

（寶鑰中）

三一五

人の相知る必ずしも對面して久しく話るに在らず、意通ずれば則ち傾蓋の遇なり。

（性靈集二）

三一六

古人は面談を貴ばず、貴ぶ所は道を同うするに在るのみ。

（高野雜筆集上）

三一七

貧道と君と遠く相知れり、山河雲水何ぞ能く阻てん、白雲の人、天邊の吏、いづれの日か念ふことなからん。

三一四　（性靈集一）

三一八

白雲天に在り滄海渺然たれども、夢魂接(マジ)はり易し、心使豈に隔てんや。

（高野雜筆集上）

三一九

物類形を殊にし、事群體を分つ、舟車用別(コト)に、文武才異なる、若し其の能に當るときは事則ち通じて快(コロヨ)し、用其の宜しきを失ふときは勞すと雖も益なし。

（性靈集二）

三三〇

箕星は風を好み、畢星は雨を好む、人の願同じからざることまた復(マタ)かくの如し。

（性靈集四）

三三一

良工の材を用うる其の木を屈せずして厦(イエ)を構ふ、聖君の人を使ふ其の性を奪はずして所を得せしむ。

（性靈集四）

三三二

曲直用に中つて損ずることなく、賢愚器に隨つて績(イサヲ)あり。

（性靈集四）

三三三

操行は星の如く、意趣は面に疑(ニ)たり、玉石途(ミチ)殊んじて遙かに九等

を分ち、狂哲區別(チマタコトン)じて遠く卅(サウ)里を隔てたり。（三教指歸上）

三三四

各々好む所に趣けば石を水に投ずるが如く、並びに悪む攸(トコロ)に趣けば脂(アブラ)を水に沃(イ)るるに似たり。（三教指歸上）

三三五

巨石は重く沈み、蚊虻は短く飛ぶ、然りと雖も巨石舟を得つれば深海を萬里に過ぎ、蚊虻鳳(ホウ)に附きぬれば高天を九空に翔る。（性靈集四）

三三六

物に善悪あり、人に賢愚殊なり、賢善の者は希れに愚悪の者は多し。（寶鑰中）

三三七

賢智は優華(ウケ)のごとく、惷癡(ショウチ)は鄧幹(トウカン)のごとし、是の故に、善を仰ぐの類(タグヒ)は猶し麟角よりも稀なり、悪に耽る流(ナガレ)は龍鱗よりも鬱(サカン)なり。（三教指歸上）

三三八

戒定智慧は麟角よりも乏しく、非法濫行は龍鱗よりも鬱(サカン)なり。（寶鑰中）

三三九

頭を剃つて欲を剃らず、衣を染めて心を染めず。（寶鑰中）

三四〇

己が臃脚(ウミアシ)を蔽(カク)して、他の腫足(ハレアシ)を發(アラ)はす。　（寶鑰中）

三四一

己れを他に從へんと欲はず、唯だ他を己れに從へんと欲ふ。　（宗祕論）

三四二

表は虎皮の文のごとく、内は錦袋の糞に同じ。　（三教指歸上）

三四三

若し夫れ鉛刀終に鏌耶(バクヤ)が績(ワザ)なし、泥蛇豈に應龍の能あらんや、燕石珠に濫じ璞鼠(ハクソ)名渉る、名實相濫すること由來尚(ヒサ)し。　（寶鑰中）

三四四

智無うして官に在れば、譏(ソシリ)を空職に致す、貪ること有つて素飡すれば、誠を尸食に遺す。　（三教指歸上）

三四五

衆生の解脱せざるは只だ名利を貪るによる。　（宗祕論）

三四六

他の少しき己れに勝つを見ては覺えずして心に嫌妨す、法を祕して人の知らんことを恐れ、增(ゾ)嫉んで疑謗を生ずれば、道芽日日に燋し、福樹朝朝に衰へ、近久遠かに愈ること百(モ)たり、必ず魔儻に落ち、身微(フトロ)へて小迹に臥し、海の深廣を知らず、瞋恚少しも相

應すれば、萬事皆除蕩するなり。

三四七　三二〇

（宗祕論）

嫉妬の心は彼我より生ず、若し彼我を忘るれば卽ち一如を見る、一如を見れば則ち平等を得、平等を得れば則ち嫉妬を離る、嫉妬を離るれば卽ち一切衆生の善に隨喜す、隨喜すれば則ち一切の法を謗せず、謗ぜざれば卽ち信受す、信受すれば卽ち奉行す。

（金剛般若經開題）

三四八

物我の諍ひ多きを泯じて、自他の不二を證す。

（性靈集七）

三四九

大士の用心は同事是れ貴ぶ、聖人の所爲も光を和げ物を利す。

（高野雜筆集下）

三五〇

菩薩は慈悲を體としたまふ、怒を現ずるは降伏のためなり。

（宗祕論）

三五一

佛教と王法と相和すること如何、師の曰く、これに二種あり、一には悲門、二には智門、大悲の門には開して遮することなし、大智の門には制して開することなし。

（寶鑰中）

三五二　三二一

道は本より虚無なり、終もなく始もなし、陰陽氣構へて尤靈則ち起る、起るを生と名け、歸るを死と稱す、死生の分は物の大歸なり。（性靈集四）

三五三

生は我が願に非ざれども無明の父我を生ず、死は我が欲するに非ざれども因業の鬼我を殺す、生は是れ樂に非ず衆苦の聚る所なり、死も亦喜びにあらず諸憂乍ちに逼る。（性靈集八）

三五四

動ずるを生死と名け、靜なるを涅槃と名く。（理觀啓白文）

三五五

法をば諸佛の師と名く、佛は則ち傳法の人なり。（祕藏寶中）

三五六

諸佛は法を以て師として自然に而も覺る。（大日經開題）

三五七

諸佛の師はいはゆる法なり、法常なるを以ての故に諸佛もまた常なり。（宗祕論）

三五八

天に翔ける雁は次第を失はず、地に蚑ふ蟺もまた陳列を守る、いかに況んや天地の最靈含識の首たる、誰か長老を尊び眉壽を貴ぶことを遺れんや。（性靈集十）

三五九

空海聞く、山高きときは則ち雲雨物を潤し、水積るときは則ち魚龍産化すと、是の故に耆闍の峻嶺には能仁（ノウニン）の迹休まず、孤岸の奇峰には觀世の蹤（アト）相續く、其の所由を尋ぬるに地勢自ら爾かなり。

（性靈集九）

三六〇

境は心に隨つて變ず、心垢（ケガ）るゝときは則ち境濁る、心は境を逐つて移る、境閑なるときは則ち心朗なり、心境冥會して道德玄（ハルカ）に存す。

（性靈集二）

道詠篇

花山天皇御製
三身如來を觀ずる心をよませたまふ。
（列聖釋教御製集）

世の中は皆佛なりおしなべて
何れの物と分くぞはかなき

崇德天皇御製
法華經方便品の「若有聞法者無一不成佛」をよませたまふ。
（列聖釋教御製集）

一たびも聞きし御法を種として
佛の身とぞたれもなりぬる

崇德天皇御製
般若心經の「色卽是空空卽是色」をよませたまふ。
（列聖釋教御製集）

おしなべて空しと說ける法なくば
色に心やそみはてなまし

崇德天皇御製
止觀の月隱ニ重山一敎手レ扇喩レ之
（列聖釋教御製集）

雪にこそねやの扇はたとへしが
心の月のしるべなりけり

後鳥羽天皇御製
（列聖釋教御製集）

愚なる心の中を尋ねみよ
外に佛の道しなければ

後鳥羽天皇御製
百首の御製の中に
（列聖釋教御製集）

さながらや佛の花に手折らまし
樒の枝にふれる白雪

後鳥羽院御製
（列聖釋教御製集）

まことには佛の國もよそならず
迷ふかぎりぞうき世とも見る

土御門天皇御製
毎夜坐禪觀三水月
（列聖釋教御製集）

むねの月心の水もよな〳〵の
靜なるよりすみ始めける

後嵯峨天皇御製
三身具足の三佛を
（列聖釋教御製集）

言葉には三つと說けども一筋に
まことをいたす心なりけり

後宇多天皇御製
顯密の教法の心をよ
ませ給ひける長歌。
（列聖釋教御製集）

くもりなき　てらせども
こゝろは空に　うきぐもを
我とへだつる　さそひきて
風のたよりに　くらきより
いつを始めと　まよふらむ
くらき道にも　ためとてぞ
これを救はむ

三世の佛は
説きおく法は
ないの宗まで
こゝろ一つを
まことの道にぞ
然はあれども
しかの園生の
吹初めしより
八年のあきを
闇をてらせる

出でにける
さま〳〵に
わかるれど
たねとして
たづね入る
これはみな
かぜのおと
わしのみね
むかへても
ひかりにて

霧をいとはぬ
鶴のはやしの
八つのもゝ年
まことの法は
ときけることは
三のくに〳〵
わが大和にぞ
あまねく照す
本のくにとて
造りもなさぬ

つきならず
けぶりより
すぎてこそ
ひろめむと
するゑつひに
つたへ來て
とゞまれる
おほひるめ
まきばしら
ことわりの

かく顯はれて　やまどりの
おのれと長く　ひさしくぞ
國をまもらむ　かためにて
代々を重ねて　たえせねば
えぶの身乍ら　此のまゝに
悟りのくらゐ　うごきなく
世を治むべき　しるしとて
清きなぎさの　伊勢の海に
ひろへる玉を　みかきもり
潮のみちひも　手にまかせ

吹く風降る雨　時しあらば
民のかまども　にぎはひて
萬づ代經べき　あしはらの
瑞穗のくにぞ　ゆたかなるべき

反歌

代々たえず法のしるしを傳へきて
　普くてらす日の本の國

悟り入る十の心のひらけてぞ
　思のまゝに世を救ひける

後宇多天皇御製
十住心論の「開内庫授讃」の文をよませ給ふ。
（刻望釋教御製集）

後宇多天皇御製
眞言院の花を御覽じて。
（列聖釋教御製集）

三つの世につねに住むべきことはりは
散らぬ櫻の花ぞ見せける

後宇多天皇御製
菩提心論の「日々漸加至十五日圓滿無礙」といふ月輪觀の心を讀みて。
（列聖釋教御製集）

日に添へて影はかはれど大空の
月は一つぞ澄みまさりける

後宇多天皇御製
百首の御歌の中に
（列聖釋教御製集）

久方の空に月日のめぐるこそ
迷をてらす始なりけれ

後宇多天皇御製
如二秋八月霧微細清淨光一の文を詠ませたまふ
（列聖釋教御製集）

まどかなる八月の月の大空に
光となれる四方の秋霧

後宇多天皇御製
八月十五夜月の五十首の歌召されける序に。
（列聖釋教御製集）

尋ぬべき方こそなけれ胸の中の
月の都にいつもすむ身は

後宇多法皇御製
（列聖釋教御製集）

心ざしふかく汲みてし廣澤の
流は末もたえじとぞ思ふ

後宇多法皇御製
三廉地現前
（列聖釋教御製集）

月のため何をいとはん雲霧も
さはらぬ影はいつもさやけし

伏見天皇御製
本末といへること
（列聖釋教御製集）

迷ひそめし心の末にひかれきて
本の悟にかへりかねぬる

後二條天皇御製

（列聖釋教御製集）

悟るべきそのみなもとは一つにて
さまざまに説く道やかはれる

長慶天皇御製

如是性といふことをよませ給ひける

（列聖釋教御製集）

長き夜の闇路の雲ははれねども
もとの光はありあけの月

長慶天皇御製

大日

（片岡山）

六塵のあまねく照すひかりこそ
三世につねなる悟なりけれ

後花園天皇御製

（列聖釋教御製集）

よしあしの迷の境離れなば
厭ひいとはぬものやなからむ

後柏原天皇御製

詠三五十首一の中に釋教を

（列聖釋教御製集）

胸の中にすまむもさぞな秋の空
月は霧をも隔てざりけり

後柏原院御製

大日

（片岡山）

中空にてらす時こそ始なく
終なき身の光なりけれ

後水尾天皇御製

春釋教

（列聖釋教御製集）

照し見よ春日に消えぬ霜もあらじ
野邊の若菜のつみはありとも

高野山の廡室のまへに藤花の咲きたるを見て。

（片岡山）

藤の花我がまつ雲の色なれば
心にかけてけふも詠めつ

（二品法親王覺法）

弘安元年百首歌奉りける時。

消えぬべきのりの燈かゝげても
高野の山の明くるをぞ待つ　（入道二品親王性助）

身口意行をよめる。

手にむすび心におもひ口にいふ
御法の甲斐はけふぞ見えぬる　（二品法親王尊助）

（片岡山）

鐘の音は明けぬときけど高野山
猶遙なるあかつきの空　（中務卿宗尊親王）

（片岡山）

○

土佐國室戸といふ所にて。

法性の室戸ときけど我すめば
有爲の波風たゝぬ日ぞなき　（弘法大師）

（兩部和歌集）

嵯峨親王おとつれて侍ける返事に。

かくばかり達磨をえたる君なれば
陀多謁多まではいたるなりけり　（弘法大師）

（兩部和歌集）

わだつ海のこぎゆく舟のあとみれば
曩莫三曼多弱吽鑁斛　（弘法大師）

（安撰和歌集）

あしゝとも善とも如何謂はてん
折々變る人の心を　（弘法大師）

義貞記及續太平記

如來直悟入道要門集

今者はや後世のつとめもせざりけり
阿吽の二字のあるにまかせて（弘法大師）

自性上人ノ知自心鈔

となふればとなへぬひまもありぬべし
いつも我身はあびらうんけん（弘法大師）

自性上人ノ知自心鈔

生れつゝ出で入息の共まゝに
阿吽の二字のたえまなければ（弘法大師）

（以上四首、安撰和歌集）

玉川の水の歌（兩部和歌集）

忘れてもくみやしつらむ旅人の
高野のおくの玉川の水（弘法大師）

高野山に入住まずなりける時、祈親上人歎き侍りて祈念し給へるに、此山の明神とて夢に告給ひける歌。（兩部和歌集）

我あらばよも消はてじ高野山
たかきみのりの法の燈（高野明神御託宣）

月輪觀をよめる（兩部和歌集）

月の輪に心をかけし夕より
よろづの事を夢と見るかな（覺超僧都）

大師の御書に寢レ霧見レ光無盡寶といへる心を（續門葉和歌集）

へだてつるきりのうへにてみる月は
霧こそ月の光なりけれ（權少僧都定譽）

即身成佛（片岡田）

誰もみな佛のたねぞおこなはゞ
この身ながらもならざらめやは（大僧正明尊）

父母所生身即證大覺位の心を　（片岡山）

誰ゆゑに此たびかゝる身をうけて
又ありがたき法にあふらん　（法印覺源）

五相成身の通達心のこゝろをよめる　（續門葉和歌集）

雲霧もへだつるかたぞなかりける
心はれぬるそらの月影　（禪惠法師）

心月輪の心を　（片岡山）

くらきよの迷の雲の晴ぬれば
靜に澄める月を見るかな　（大僧正行尊）

是心是佛の心を　（片岡山）

よもすがら佛の道をもとむれば
我が心にぞ尋ねいりぬる　（源信僧都）

菩提心論に乃至身命而不惜文を　（片岡山）

あだならぬやがてさとりに歸りけり
人の爲にも捨つる命は　（西　行）

高野にまゐりて讀み侍りける　（片岡山）

曉をたかのゝ山にまつほどや
こけのしたにもありあけの月　（寂蓮法師）

密嚴世界　（片岡山）

まよひしもひとつ國ぞとさとる哉
誠の道のおくぞゆかしき　（前大僧正隆辨）

現世安穩　（慈圓詠法花經百首）

後世も嬉しかるべき道なれば
今日行く空も長閑かりける　（慈圓大僧正）

（慈圓詠法花經百首）

吹く風も枝を鳴さぬ行末は
散らぬ花をや宿に眺めむ（慈圓大僧正）

避走遠住（常不輕菩薩）
（法華經百首）

うてはにぐ逃ても拜む心より
人を輕めぬ名をぞ留むる（慈圓僧正）

以種々形遊諸國土
（法華經百首）

三十餘三の誓しきは
さま〴〵になる姿なりけり（慈圓僧正）

十界の歌
（片岡山）

さま〴〵にわくる姿もまことには
ひとつ佛のさとり成けり（慈鎭和尚）

光明遍照十方世界念佛衆生攝取不捨の心を
（空華和歌集）

月かげのいたらぬ里はなけれども
ながむる人のこゝろにぞすむ（法然上人）

心月輪の心を
（片岡山）

胸のうちにすむ月影の外に又
深き御法の心やはある（心海上人）

大般若經の夢中說夢の心を詠める
（明惠上人歌集）

旅の世にまた旅眠して草枕
夢の中にも夢を見るかな（明惠上人）

なき人の手にものかきてと申ける人に光明眞言をかきてをくり侍るとて
（明惠上人和歌集）

書つくる跡に光りのかゞやけば
くらき道にもやみははるらむ（明惠上人）

（明恵上人和歌集）

生死海に慈悲の釣舟浮ぶなり
こぎゆく音は弱吽鑁斛（明恵上人）

（明恵上人和歌集）

金剛さたの大樂なむぞ遠からむ
心きよくば素羅多薩怛鑁（明恵上人）

父母所生身即證大覺位（衆松道詠集）

たづね入るみやまの奥の里ぞもと
我が住みなれしみやこなりけれ（道元禪師）

坐禪（衆松道詠集）

にごりなき心の水にすむ月は
波もくだけてひかりとぞなる（道元禪師）

大日經成就悉地品無垢妙清淨圓鏡常現前（片岡山）

曇りなくいにしへ今をへだてぬは
心にみがく鏡なりけり（了然上人）

大日經、三三昧耶品現般涅槃成就衆生（片岡山）

まよはじな入りぬと見ゆる月も猶
おなじ空行く影と知りなば（了然上人）

眞言の心いと深きよし申して侍りける人の返事に（片岡山）

深しともおもひな果そ法の水
その源はくみもつくさじ（前大僧正道寶）

菩提心論の中に大迷途之法從二妄想一生といへるこゝろをよみ侍りける（續門葉和歌集）

よしあしをわけて思ひし心こそ
なにはの事も迷ひきにけり（法印覺雅）

布字觀成就といふことを
（續門葉和歌集）

阿縛羅賀迦ふじの高根に雲きえて
心きよみに月ぞさやけき（憲靜上人）

秘密莊嚴心のこゝろにて生死涅槃といへる事を
（續門葉和歌集）

よの中をいとふうつゝも夢なれば
さながら夢ぞ現なりける（法印賴瑜）

傳法とげてのち
（續門葉和歌集）

人の身と生るゝだにも稀なるに
また上もなき法にあひぬる（權律師兼勝）

正和二年法皇高野山に御幸待りし時世々の跡にこえて山のほど御興にも召されざりしかば思ひつゞけ待りける（片岡山）

高野山みゆきの跡はおほけれど
實の道は今ぞ見えける（僧正道順）

灌頂とげてのちに
（續門葉和歌集）

なにごとか世にうれしきと人とはゞ
まことの法にあふと答へん（法印隆勝）

本來成佛の心を
（佛國禪師和歌集）

雲はれて後のひかりとおもふなよ
もとよりそらにあり明の月（佛國禪師）

十界互具のこゝろを
（二祖御詠集）

よしあしのとをの姿はひとつにて
たがひにそへば離れざりけり（他阿上人）

後二條院かくれさせ玉ひての比、かの水精の御鏡をつかはされて侍りけるを七日光明眞言の法を行ひて返しわたし奉るとて
（片岡山）

世のつねの光ならねばますかゞみ
底まですめる悟をぞ知る（前大僧正禪助）

灌頂うけて後
（續門葉和歌集）

さぞなげに心の闇の雲晴れて
ふたゝびみつる秋の夜の月（權少僧都信助）

舉足下足皆是道場と云ふこゝろを
（夢窓國師和歌集）

ふるさとゝさだむるかたのなきときは
いづくにゆくも家路なりけり（夢窓國師）

般若心經
（經旨和歌）

なしときく物を何ぞとたづぬれば
ありがほにみる心なりけり（權僧正範緣）

高野山にて
（空華落葉集）

鐘の音をきけば心も高野山
これやうき世の外の夕暮（空華上人）

（蓮如上人和歌集）

音にきく益田の池をいまみれば
堤のかたちそれとのみ知る（蓮如上人）

願以此功德
（慈鎭和尚三百年遠忌詠法花經和歌）

あまねくや四方に匂ひを散すらん
こゝぞ都の花の春風（惠空）

弘法大師御影供にたてまつりける
（以下七首、興山五代集略抄）

これのみやむかしのひかり殘しけん
高野の奥の苔の戸の月（雲堂大德）

くだる世もにごらぬものをくみて知れ
人の心の玉川の水（雲堂大德）

正月紫宸殿の御修法を拝み奉りて

にごらすはたれが科ぞもみな人の
心の底の玉川の水（雲堂大徳）

幾千とせ君ぞますべき天地も
いやゆたかにといのる御法を（雲堂大徳）

末いく世つたへ榮えむうけつぎて
ひめぬる道のふかき御法は（雲堂大徳）

大空に聲字實相の聲きけば
三つの寶の鳥ばかりかは（雲堂大徳）

（以上七首、興田五代集略抄）

以下六首、眞言宗の心をよめる。

みちのくやまだ深からぬ苔の戸に
高野の山の月はすむらん（雲堂大徳）

内日さす宮の八重垣高ければ
ひま求めても見るよしぞなき（契冲阿闍梨）

上もなき法にしあればわだのほか
あのくたらよりこゝにこしかな（契冲阿闍梨）

法の海にはやく吾が身を投げませば
生死の川におぼゝれましや（契冲阿闍梨）

（以下二四首漫吟集）

菩提心論衆生愚蒙不可強度の心を

おなじ池のこなたかなたの蓮葉に
　ことなる露のかよふ白玉（契沖阿闍梨）

身を心こゝろを身にて國は四方
　命は三世に住む人やたれ（契沖阿闍梨）

夢ながらやがてうつゝと人知らば
　ねても覺めても佛なりけり（契沖阿闍梨）

夕やみに玉な授けそそならぬを
　あざむくやとて碎きもぞする（契沖阿闍梨）

三力の心を

以下二首、濯佛

身ははちす心は月と聞きなれぬ
　つひに見る時あらんとぞ思ふ（契沖阿闍梨）

あめつちに今日さす御手や法の舟
　こゝろの月ををしへそむらん（契沖阿闍梨）

四方に行くけふの歩みぞたのもしき
　いづくか法の道なかるべき（契沖阿闍梨）

如來藏性

みなそこにまた打出でぬ石の火を
　たが言の葉かいひは消つべき（契沖阿闍梨）

以下二首、不動使者尊

いはにます動きなき名をたのむかな
千引に過ぎて心うつすな（契沖阿闍梨）

三五六

いはにまし動きなき名はおひながら
佛のつかひ四方にこそゆけ（契沖阿闍梨）

以下十一首、弘法大師

波風はうゐのまに〳〵よすれども
空しき海やむろと成りけむ（契沖阿闍梨）

高野山世の浪風ぞ聞えこぬ
こけのむろ戸にまたこもりつゝ（契沖阿闍梨）

明くるまつ高野の奥にいつかその
藐姑耶（はこや）の山の霧ははれまし（契沖阿闍梨）

高野山こけのみむろを天の戸に
とぢし光もいつかてらさん（契沖阿闍梨）

高野山おくに苔むす室の戸も
たつのはつ花いつかひらけし（契沖阿闍梨）

筑波根を人はいふなりわがためは
高野の山にます蔭はなし（契沖阿闍梨）

三五七

高野山峯のある雲ふみがたみ
ふもとを見てや此世過ぎなん（契冲阿闍梨）

蹈みみてもあふげばいとゞ高野山
いつ天雲にのりは得なまし（契冲阿闍梨）

たかの山おくのみむろに物申す
道まどはすなながくいるまで（契冲阿闍梨）

ことにいへば只おほかたの高野山
うへなき法ぞ峯には有りける（契冲阿闍梨）

（以上湯吟集）

如實知自心
（似雲和歌集）

空にみち塵にをさまる心もて
なに身ひとつを身とたのむらん（契冲阿闍梨）

おのづから心のやみははれにけり
外にもとめぬ月の光に（似雲）

弘法大師
（慈雲尊者和歌集）

萬代も絶えず盡きせずもろ人の
あふぐ高野の峯のつき影（慈雲尊者）

明算阿闍梨
（慈雲尊者和歌集）

かゝげては今幾千代かひかりそへ
高野のおくの法のともし火（慈雲尊者）

日本國（慈雲尊者和歌集）

よもつ海八島の外に國はあれど
わが日本のあきらけきくに（慈雲尊者）

大日（慈雲軒根岸典則）

あまつ日のあまねく照す光もて
人の心の闇ものこらず（溪雲）

高野のみ寺に宿りて（良寛歌集抄）

紀の國の高野のおくの古寺に
杉のしづくを聞きあかしつゝ（良寛）

阿字による戀（仙崖和尚捨小舟）

戀すべし心のあじとなるからに
三摩地を常に忘る間もなし（仙崖和尚）

高野の山の御影供の日に詣でて懺悔の心を（小自在庵歌抄）

玉川の水に心をすまさずば
高野の山の月は宿らじ（南園）

不動坂の花盛なりければ（小自在庵歌抄）

玉川のふかきえにしを結ばずば
高野の山の花を見ましや（南園）

（高野山千百年史）

高野山やまにはあらで蓮葉の
花坂のぼる今日の嬉しさ（福田行戒）

（高野山千百年史）

高野山その曉の月かげを
おぼろながらに見るが嬉しき（福田行戒）

よゝを經てけがれし袖もそゝがなむ
いざくみかけよ玉川の水（福田行戒）

高野山こけのとぼそはしづかにて
音もきこえず春さめのふる（福田行戒）

（行誡釋教百首）

名も高き高野のおくの玉川は
汲までも水のひとり澄むらん（眞言長者乘禪）

（高野山千百年史）

○

迷悟不二（片岡山）

ふたつなき心はなにか厭ふべき
まどひの外のさとりならねば（入道前攝政左大臣）

菩提心論の我見自心形如月輪を（片岡山）

よそに見る影とはいはじ心にも
空にも同じ月ぞ出ぬる（惟賢上人）

理趣經、慾無戲論性故讃無戲論性（片岡山）

おろかなる心に種はなかりけり
四方の草木の有るに任せて（前僧正公朝）

如實知自心の心を（片岡山）

うたがはで今こそたのめ僞の
なきよは法のまこと成とも（前權僧正定顯）